校長室だより

共学共高

第40号

令和５年４月21日発行

発行責任者
白梅学園高等学校長
武　内　　彰

授業～それは学び合いの場

私は毎日校内を一周して各クラスの授業を観ている。時間のないときには一クラス当たり数分しかいられないが、余裕のある時には２時間かけて全校を回ることもある。

先生方に「生徒間の対話のある授業場面の創造」をお願いして３年目を迎えた。今年度は「生徒間の対話と表現のある授業」づくりをお願いしている。

どの学年においても、先生たちが創意工夫をして、対話の場面を設定してくれているのはありがたいことだ。入学したばかりの 1 年生も、すでに知り合ってから長い時間が経過したような様子で、活発に対話をしてくれている。嬉しい限りだ。ただ、校長が授業を観に来ることにあまり慣れていない生徒もいるのか、私の姿を見つけると、隣の友達にささやいて二人して私の方を気にする様子を見せたり、私と目が合うと会釈をしてくれる生徒がいたりと、１年生の反応もいろいろである。

２年９組の古典探究（K 先生担当）では、大鏡と枕草子を同時に読解しており、敬語の使い方から作者のどのような意図があるのかを 4 人グループで話し合い、代表生徒がホワイトボードに板書して発表していた。なかなか面白い取組である。K 先生はベテランであるが、いつも様々に工夫した授業づくりをされており、頭が下がる。

１年４組の歴史総合（S 先生担当）でも、先生からの投げかけに対して、生徒たちがペアで話し合い、どのように考えたのかを表現する場面が見られた。生徒たちは臆することなく考えを言えるところがよい。授業の中で「間違えたらどうしよう」「まわりの子に変に想われないかな」などと考える必要はないのだ。学びのプロセスは失敗の連続だ。最先端の研究に従事している研究者の方々でも同様なのだ。友達との対話の後だと、クラス全員の前であっても、表現しやすくなるのも対話の利点の一つだ。

2年9組　古典探究

1年4組　歴史総合

1年8組の英語コミュニケーションⅠ（H先生担当）では、文型SVOCMについての学習をペアで行っていた。(Sは主語、Vは述語、Oは目的語、Cは補語、そしてMは修飾語である) ちなみに、私はMが何なのかわからず (情けない)、H先生に教えてもらった・・・・Modifierの Mだそうだ。生徒たちは嬉々として取り組んでいた。

3年選択生物（Y先生担当）では、中庭の芝生へ出て、何やら植物に関する観察をしているようだ。私は校舎の廊下にいたので、具体的にどのような観察だったのかはわからなかったが、生徒たちは真摯に取り組んでいた。

1年8組　英語コミュニケーションⅠ

3年選択生物

3年選択物理（G先生担当）でも。生徒たちが中庭に出てきて、ちょうど1年生の授業を観に行こうとした私と出くわした。複数の生徒がこちらに向かって手を振ってくれ、「校長先生、実験をやるのを知っていたのですか？」と聞いてくる。「いや、単なる偶然だよ。これから 1 年生の授業を見に行こうとしていたのです」と答える。G 先生がノートパソコンを 2 台向かい合わせて、それぞれを音源として音波を発生させ、向かい合わせたパソコンの間を生徒が一人ずつ歩いて、音の強弱があるかどうかを確認する実験である。「ここで強くなっている」「ここで弱くなっている」「変わらない」と生徒たちの反応はそれぞれだが、

ゆっくり歩くと変化していることはわかる。2つの波が重なり合い、強め合ったり弱め合ったりする現象を「波の干渉」といい、それを体感するための実験である。おもしろい工夫である。私が現役の物理教師だった時には、水波で実験したことを記憶している。そのまま3年生と一緒に教室へ戻り、干渉についての学習の様子を見させてもらった。頑張れ！リケジョ（理系女子のことをいう）

学校の根幹は授業である。生徒にとって魅力ある授業を創ることは、決して簡単なことではない。現に私は初任者の時に、授業が成立しなかった。自分が高校の時に教わったイメージそのままに、チョークと黒板を使って説明する授業をしたのだが、その学校の生徒たちには受け入れてもらえなかった苦い経験がある。そこから授業づくりの学び・研究がスタートし、9年くらい経てやっと自信を持てるようになった。お恥ずかしい話である。

これからも「生徒間の対話と表現のある」白梅学園高等学校の授業の様子をお伝えしていきたい。

（共学共高とは：本校のディプロマポリシー（育てたい生徒像）の一つで、「共に学び、共に高め合う」生徒の姿を表す）